

南西諸島の大洞系土器とその周辺

設楽 博己

要旨

縄文晩期終末の東日本系の土器が西日本一帯に分布しており、奄美地方でも確認されていたが、沖縄県北谷町平安山原遺跡群で大洞 A₁ 式系土器と土製品が検出され、分布は沖縄県域に及ぶことがわかった。この論文では、奄美・沖縄地方など南西諸島の縄文晩期終末の大洞系土器とそれに関連する資料 13 例を実見した結果を報告する。奄美地方の大洞系土器に土着化傾向のあることがすでに指摘されていたが、製作技術の多様性の分析からそれを追認するとともに、平安山原 B 遺跡出土土器が製作されたのは西日本であるにしても東北地方北部の直接的な関与は否定できないことを指摘した。南西諸島の東日本系土器は東北系と北陸・山陰系を中心に展開するが、13 例のなかでも喜界町矢筈遺跡の土器は、祖形となる東北地方の大洞 A₁ 式土器と北陸地方の長竹式土器に最も近く、この遺跡が南西諸島における東日本系土器拡散の起点である可能性も浮かび上がった。

1. はじめに

1990 年代前半に、西日本の各地で東北地方に系譜が求められる縄文晩期終末の土器の類例が知られるようになった。その先駆けをなしたのが、大分市植田市遺跡の鉢形土器〔吉田 1993〕と福岡市雀居遺跡〔松村ほか 1995〕および高知県土佐市居徳遺跡の壺形土器〔曾我ほか 2001〕である。西日本の各地にこの時期の大洞系土器を含む東日本系土器が多数存在していることがわかった。これら縄文晩期終末の東日本系土器は小林青樹によって類例が集成され、大洞 C₂ 式の古段階まではせいぜい近畿地方にまでわずかな資料が分布しているにすぎないが、大洞 A₁ 式期に分布が拡大し、九州地方にまで濃密に分布するようになることと、直後には分布域が縮小していくという、時期を追った分布の変動も明らかにされている〔小林編 1999〕。

その後、この時期の東日本系土器は奄美地方にまで分布が拡大していることが判明した。これまでに知られている奄美地方の大洞系土器およびそれと関係した東日本系土器は、喜界島の喜界町矢筈遺跡の 2 例、奄美大島の龍郷町ウフタⅢ遺跡の 3 例、手広遺跡の 2 例、徳之島の伊仙町トマチン遺跡の 4 例である。

2009 年、北谷町教育委員会の発掘調査によって同町平安山原 B 遺跡から大洞系土器が、同 A 遺跡から大洞系の文様のある土製品が出土し、分布が沖縄県域にまで及ぶことが明らかになった。発掘調査報告書でそれらは紹介され、まとまった論考も提示されている〔島

袋ほか編 2016 B・山城ほか 2017〕。

本稿では、これまでに知られている奄美・沖縄の南西諸島における大洞系土器及びそれと関連する資料を実測して観察した所見をもとに、東北地方や北陸地方の縄文晩期終末の土器と比較して、それらの系譜や性格を考察する。

2. 南西諸島の大洞系土器と関連資料

2-1. 沖縄県域の大洞系土器と土製品

沖縄県北谷町平安山原 B 遺跡 平安山原 B 遺跡は、沖縄本島中部の西海岸、北谷町字伊平小字平安山原に所在する。遺跡は標高 3～5 m の浜堤、沖積地に立地する。背後の北側に標高 30 m ほどの丘陵を控え、南側には砂丘が存在し、ナガサ川が西に流れて東シナ海に注ぐ。埋め立て以前の海岸線まではおよそ 200 m である。

発掘調査は在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）の返還に伴う区画整理事業によるもので、2004 年に北谷町教育委員会によって着手された。発掘調査の結果、砂浜は弥生中期に併行する浜屋原式土器を主体とするが、弥生前期に併行する阿波連浦下層式から浜屋原式土器期に繰り返し利用された燃焼遺構が検出された。浜堤では、古墳時代に併行する大当原式土器が主体をなす〔島袋ほか編 2016 B〕。

大洞系土器は 2009 年に検出された。本遺跡の層序は、上層から I～V 層に区分され、大洞系土器はⅢ層最下層のⅢ e 層から出土した。この層から出土した土器は大当原式土器を主体とするが、わずかながら奈

良・平安時代に併行するアカジャンガー式土器・フェンサ下層式土器も出土し、縄文中期の船元系土器も1点出土するなど単純な層位ではなく、大洞系土器は原位置を保っていない可能性が高いとされる〔山城ほか2017〕。

平安山原B遺跡の大洞系土器は、台付鉢の脚台部である(図1-1)。残存しているのはおよそ四分の一であり、復元した底径が9.2cm、鉢部との境までの高さが4.0cmで、裾の広がりそれほど顕著ではない。全面に工字文が施されるが、構図は1条の隆帯を間に挟んで上下に1段の流水文状の工字文を描く〔島袋ほか編2016B:74~75・114〕。この工字文には、以下2点の特徴がある。

- ①工字文の反転部分は丸みをもって整形される。
- ②隆線はエッジが削られたためにやや丸みを帯びていて、彫刻的な印象を強めている。

たんに沈線で工字文を描くだけではなく、立体感があるように仕上げた工字文といえよう。実測図の左上や左下、あるいは中央上段の工字文が反転する上や下の部分は、左右の反転部分を分断する縦の沈線をたんにまっすぐに加えるのではなく、縦の沈線のなぞりをそのまま上下の水平の沈線のなぞりに連続させたためにカーブを描いている点が特徴的である。

沈線の部分にところどころ赤色塗彩痕が残る。内面は指頭によるケズリの痕が顕著であり、平坦にしようという意識があまり感じられない。黄褐色で、銀色の細かな砂粒を多く含む。磨滅が著しく、左右の破断面や鉢と台部の接合部分の割れ口などは角が取れて口縁部のようにになっている。

平安山原A遺跡 平安山原A遺跡は平安山原B遺跡の西に隣接している〔島袋ほか編2016A:321~322〕。出土した土器で最も多いのは貝塚後期文化のアカジャンガー式とフェンサ下層式土器であり、浜屋原式土器と大当原式土器はともにわずかである。

出土した土製品は、4.7cm×2.7cmの円形の製品である(図1-2)。復元した直径が1.7cmの孔をもつが、中央にあるのか不明であり、中央に開いているとすれば楕円形の土製品になるかもしれない。孔のまわりに工字文を施す。内面に文様はない。文様の構図は、外側が1と同じ構図の流水状工字文であり、右下端の隆線が下へと反転して内側の文様につながる。内側の文様は2条の沈線を分断して施し、中間に列点を加えたものであり、工字文とは異なる。1にくらべて立体感に乏しく沈線的で平板的であるが、工字文の反転部分が丸みをもっている点は1と共通している。また、最外部の沈線を縁部に向って上状にして縁部を2こ

ぶ状に仕上げている複雑なつくりも注目できる。

やや赤みがかった褐色で、銀色の細かな砂粒を多く含む。

2-2. 奄美地方の大洞系土器と関連資料

鹿児島県喜界町矢筈遺跡 矢筈遺跡は遺跡として登録されていないが¹、英啓太郎によって土器や片刃石斧などが表面採集されて遺跡であることが認識された。土器は数片採集されたが、そのうちのあるものは島袋晴美によって東日本系の土器と考えられている〔島袋2016:432〕。

矢筈遺跡出土の1例は、広口壺と見なされる土器の胴部である(図1-3)。胴部に3条の隆線を巡らしてその下に工字文を描く。単位文様の間や肩部の器面を削り込むことで文様を浮き彫りにし、さらに隆線のエッジを削って整え丸みをもたせて仕上げる②手法による。工字文の反転部は丸みをもつ①手法によっている。工字文の右下から隆線が斜め上にのびており、隣の単位文につながっていくと思われる。

本来の色調は褐色であるが、黒光りした黒色塗抹物が表面についており、それによって器面が黒褐色を呈する部分が多い。胎土は砂粒が少なく、緻密である。

2例は鉢形土器であり、体部に2条の沈線文で対向する重四角文を描く(図1-7)。まったくの沈線表現によって角張った長方形を描いており、①・②の手法は認められない。茶褐色である。

鹿児島県龍郷町ウフタⅢ遺跡 ウフタⅢ遺跡は、鹿児島県の奄美大島北東海岸、大島郡龍郷町浦に所在する。北から笠利湾がせまり、南は太平洋をまじかにした幅約600mの陸繋部南端の砂丘上に遺跡は立地する。1995年に龍郷町教育委員会により県営道整備事業に伴う発掘調査がおこなわれ、縄文時代の貝層や石囲いの住居跡が検出された〔龍郷町教育委員会編2002〕。

出土した土器は、縄文後期の嘉徳Ⅱ式系土器や縄文晩期~貝塚後期の阿波連浦下層式、カヤウチバンタ式や夜臼式系の刻目突帯文土器などである。工字状文を施す東日本系の土器は、カヤウチバンタ式類似土器・刻目突帯文土器と共伴し、青崎和憲は縄文晩期終末の仲原式~なかぼる弥生前期併行期の阿波連浦下層式相当期に比定した〔青崎2002:45〕。

ウフタⅢ遺跡出土土器の1例は浅鉢である(図1-4)。口縁部に横に長く頂部が少しくぼんだ突起をもつ。破片のために文様の構図の全体像は不明であるが、独立した工の字を横に連ねたものと思われる。工字文の反転部分は直線的で直角に近く、隆帯のエッジ

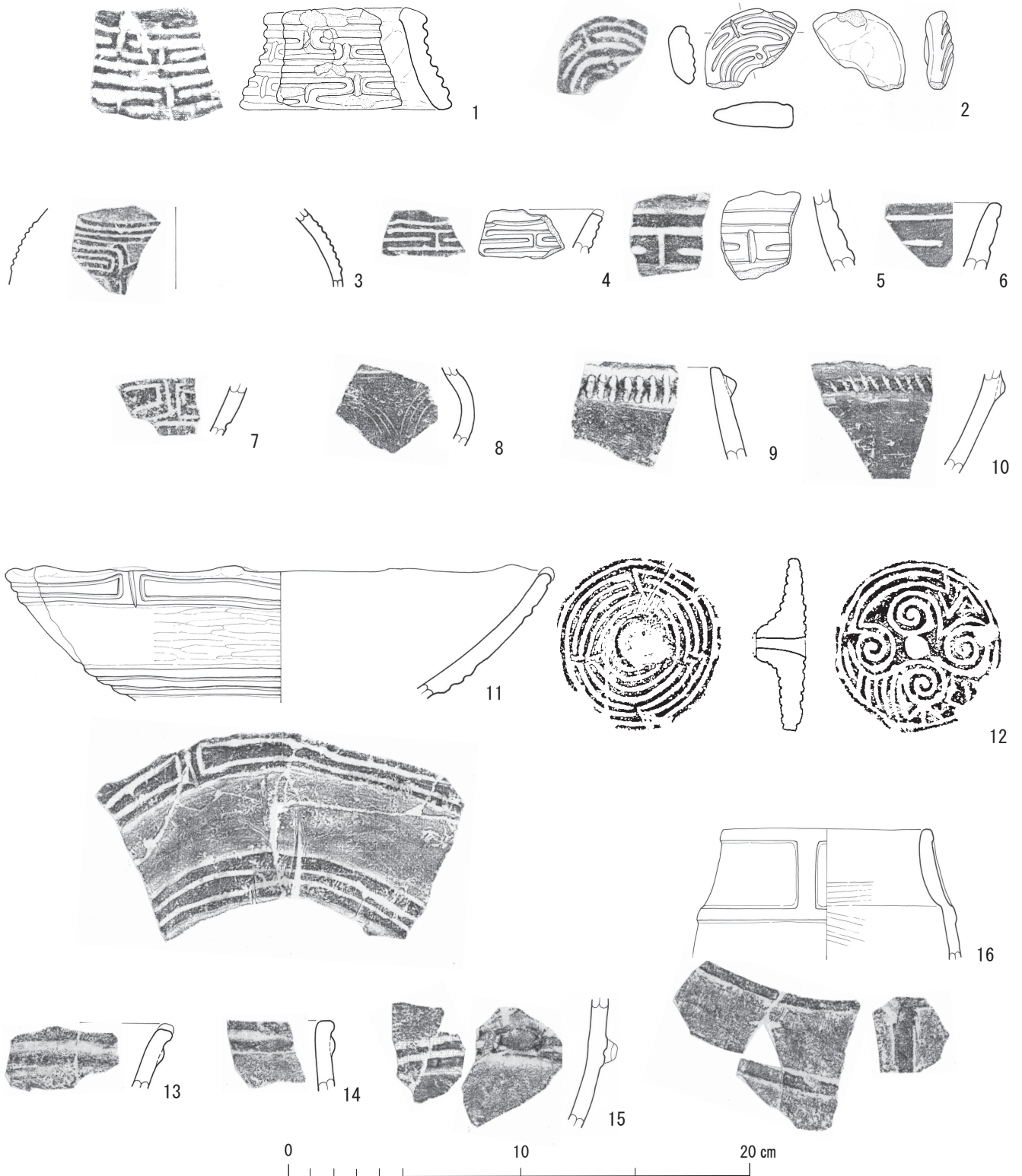


図1 南西諸島の縄文晩期終末東日本系土器と関連資料

1 沖縄県北谷町平安山原B遺跡、2 沖縄県北谷町平安山原A遺跡、3・7 鹿児島県喜界町矢筈遺跡、4～6・8～10 鹿児島県龍郷町ウフタIII遺跡、11・12 鹿児島県龍郷町手広遺跡、13～16 鹿児島県伊仙町トマチン遺跡

も処理されていない。文様は繊細で整っており彫刻的ではあるが、沈線文風である。①・②の手法が顕著ではないために、そうした印象を強めている。

2例は肩に段をもつ深鉢である。文様を削り出し手法で浮き彫りにしているが、沈線はまったく直線的で構図は直角に近い長方形をなす(図1-5)。3例はその傾向をさらに強めており、沈線が細くてもはや工字文とは呼べない構図に変化している(図1-6)。

5・6は赤褐色でやや砂質であるなど、在地の土器の特徴を示すが、4はやや黄味がかかった淡褐色で焼成は堅緻である点から、在地の土器とは異なっている。これらといっしょに出土したのは板付Ⅰ式と夜白Ⅱb式の九州島系の土器であり、そのいくつかを示した(図1-8~10)。

鹿児島県龍郷町手広遺跡 手広遺跡は、ウフタⅢ遺跡から1kmあまり西に行った太平洋に面する同じ砂丘上に位置する。1984年、熊本大学文学部考古学研究室による学術調査が行われ、2基の石組み遺構などが検出された。遺物包含層から出土した土器は、縄文後期の嘉徳Ⅰ式から縄文晩期、弥生前期の土器や、さらには奈良・平安時代に併行する兼久式土器までを含んでいる。

第9層からカヤウチバンタ式に類似した土器が、第6層からは外耳や山形の突起が盛行する土器が出土して磨研壺も出現し、第5層から刻目突帯文・板付式に類似した土器が含まれ、丹塗磨研壺も出土するようになる。東日本系土器は、第6層から出土した〔西谷編1986:31〕。

手広遺跡の1例は、小波状口縁の浅鉢である(図1-11)。口縁部と胴部に文様をもつ。口縁部は2条の沈線文であるが、一か所波頂部の下に縦の沈線を加えてその両脇で2条の沈線は四角につながっている。これは工字文の縦の区画線と反転部が沈線化して省略されたものであろう。文様モチーフは、矢筈遺跡の2例に近い。胴部は3条の平行沈線文である。口縁部文様帯と胴部文様帯の間の広い無文部は、削って磨きをかけて一段低くすることにより、文様帯の高まりを強調している。沈線の中に形成された隆線の部分は、②の手法により多少立体的な表現になっている。

茶褐色であり、胎土や質感からして在地で生産された土器であろう。

手広遺跡の2例は紡錘車のような形の土製品であり、片面の全面に工字文が施される(図1-12)。工字文は直線的で直角に表現され、①・②手法を欠いている。工字文は、1や3・4のような規範からははずれている。もう片面にも同じような直線的な工字文

が認められるが、その末端から派生した四つの渦巻文が目立つ存在になっている。

鹿児島県伊仙町トマチン遺跡 トマチン遺跡は、鹿児島県の徳之島、伊仙町佐弁に存在する。徳之島の東南海岸における低位段丘上の砂丘遺跡である。鹿児島大学埋蔵文化財センターの新里貴之を代表とする科学研究費による研究として、先史時代の集落と埋葬を明らかにする目的で2004年から発掘調査された〔新里編2013〕。その結果、縄文晩期終末から貝塚後期文化の初期における石棺墓2基と土坑墓1基が調査された。土器は7~11層から縄文晩期初頭の喜念Ⅰ式・宇宿上層式土器が、3~6層から縄文晩期終末の仲原式土器が出土した。

トマチン遺跡には工字文の土器はないが、島袋晴美が東日本系の可能性がある土器として図1-13~16を抽出した²〔島袋2016:432〕。これらは3層、一部4層から出土した。新里はこれらの土器を手広遺跡、宇宿小学校遺跡、サモト遺跡、ウフタⅢ遺跡出土土器に類例を求めて比較し、それらは宇宿上層式~阿波連浦下層式段階に伴うようだと述べている〔新里編2013:93~98〕。

いずれも深鉢である。13と14は口縁の下に1条の突帯を巡らす。突帯に刻目はなく丸みを帯びる。15は胴部に2条の隆帯を巡らし、一か所にそれをまたいだ楕円形の突起を加える。突起の頭は指で押さえられてくぼんでいる。16は肩に段をもって口頸部が少し内湾した、いわゆる屈曲甕の形態をなす。口縁部と屈曲部に幅の広い隆帯を巡らす。口縁の隆帯から同じ幅の隆帯を垂下した破片があり、接合はしないが同一個体と見なして復元した。

いずれも赤褐色をなして砂質で焼成はあまり良くなく、地元の土器の特徴を有している。

3. 大洞A式土器などとの比較

3-1. 分類

以上が、工字文およびそれと関係する文様をもった奄美・沖縄の南西諸島の土器と土製品である。これらを文様の系統と表出手法にもとづいて分類する(図2)。

まず、文様の系統であるが、図2-1や2を典型とする工字文と、図2-8・9の長方形の沈線文、そして突帯文や隆帯文の三つに区分することができる。それぞれⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類としよう。Ⅰ類が図2-1~7、Ⅱ類が8・9、Ⅲ類が10~13である。

文様表出手法の点から、Ⅰ類はいくつかに区分できる。平安山原B遺跡に顕著であった工字文の①・②手

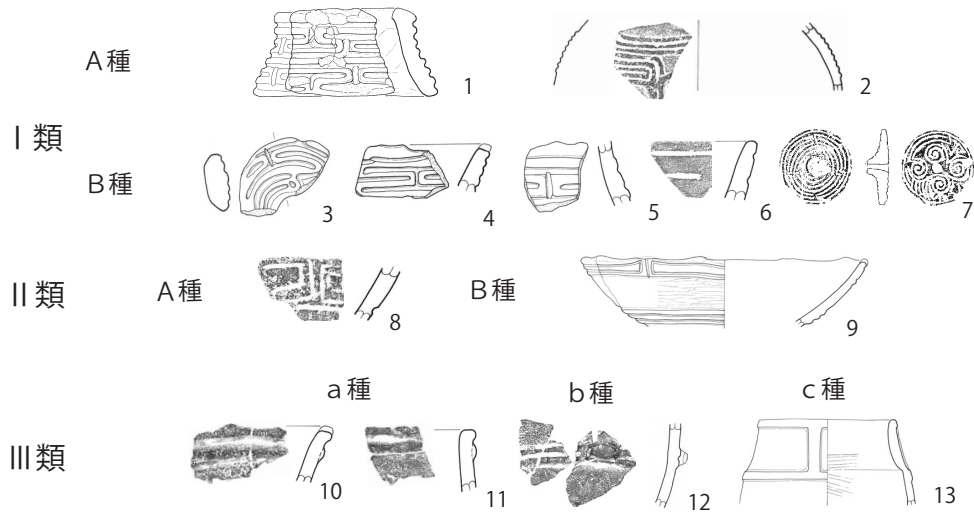


図2 南西諸島の大洞系土器と関連資料の分類（縮尺不同）

法のいずれももつものと、そのいずれかあるいは両者を欠いて立体感が乏しくなったものである。それぞれ A種、B種とする。1・2がA種、3～7がB種である。B種も3・4のようにA類種に近いものと、沈線化が進んだ5～7に分けられるかもしれないが、区別は明瞭ではないのでB 1種とB 2種くらいにしておく。

I類のA種とB種の差は、A種がより本場の工字文に近く、B種がそれからの逸脱がA種よりも顕著な点である。そうした差であれば、II類の8と9も長方形の沈線文の条数が2条と1条の差があり、これは後に述べるようにII類の起源の地における要素からの逸脱度合いの差なので、8をA種、9をB種と区別しておく。

I～III類の系譜と時期を明らかにしながら、起源と考えられる土器群と比較しつつ、その特徴を述べてみたい。

3-2. I類

平安山原B遺跡の1の特徴は、台付鉢であることと、工字文の文様表出に①と②が認められることである。②は石川日出志が工字文技法と呼んだ大洞式土器に特徴的な描出手法であり〔石川 1985：387～388〕、文様モチーフを含めたこれらの特徴から、本資料は大洞A₁式系土器ということが出来る。

大洞A₁式の分布圏において、台付鉢の台部の形状は岩手県以南では裾が大きく広がる（図3-3・6）のに対して、青森県域では裾の開きが少なくどっしりしたものが多い（図3-1・2・4・5）。図1-1はどちらかといえば東北地方北部のものに近い。しかし、この地域の脚部の文様は、流水状工字文の場合は1段、匹字状の単位文の場合も交互に反転させながら横

1段で展開するものがほとんどであり、本例のような2段構成は認められない（図3-1～6）。この文様は、大洞A₁式土器の鉢形土器や壺形土器の胴部文様（図3-7～9）と同じである。したがって、図1-1は器形からは東北地方北部と共通するが、文様の点では他の器種のモチーフを用いた変形品といえよう。

工字文の反転部分もたんに縦の刻みを加えるのではなくて、刻みからカーブを描いてそのままぞりながら工字文の基底線へとつなげていくのは、大洞A₁式の工字文や同時期の中部高地地方などの浮線網状文土器に認められる手法である。

このような大洞A₁式にきわめて近似した特徴や胎土などからすると、図1-1は沖縄でつくられたものではなく、どこかから搬入されたものとみてよい。この時期の大洞系土器は西日本に広くみられるが、台付鉢はない。西日本ばかりでなく、山形県域～福島県域以南、関東・中部・北陸地方の浮線網状文土器の分布圏にもほぼ認められない。脚台部の特徴は、青森県域という東北地方でも北部と共通する。したがって、一つの候補は東北地方でも北部の地域である。しかし、弘前大学で地質学を研究する柴正敏によると、この土器には鹿児島県域の鬼界カルデラの噴火に伴って降下したアカホヤが含まれており、西日本のどこかで作られたと推定されている〔山城ほか 2017：139〕。したがって、東北地方北部であることはおろか、東日本であることも否定された。

矢筈遺跡の図1-3は、①・②の手法を兼ね備えていることに加えて、大洞A₁式に典型的な単位文をつなぐS字状の隆線（図3-10・11）が見えており、大洞A₁式の壺形土器などの文様に非常に近い。沈線と隆線はいずれも細く密で整っており、こうした技



図3 南西諸島の東日本系土器との比較資料

1・4 青森県宇鉄遺跡、2 青森県観音林遺跡、3・6～10 岩手県九年橋遺跡、5 青森県亀ヶ岡遺跡、11 岩手県飯島遺跡、12～14 石川県長竹遺跡、15・17、岡山県津島岡大遺跡、16 愛媛県林・坊城遺跡、18 愛知県水神貝塚、19 長野県女鳥羽川遺跡、20 長野県離山遺跡、21 福岡県板付遺跡、22 福岡県雀居遺跡、23 山形県作野遺跡

術は本場の大洞 A₁ 式にしばしば認められる（図 3-11）。胎土は緻密であるのに加えて、黒色塗抹物とも関係して黒褐色を呈している。地元の土器が一般的に赤褐色を呈して白色砂粒を含んで砂質であることからすれば、大洞 A₁ 式が分布する東日本のいずれの地域からの搬入品の可能性がある。

しかし、工字文の下に垂下された 1 条の沈線をもつ隆帯文は大洞 A₁ 式には見かけない。また、大洞 A₁ 式土器のこの種の工字文の単位文は二重の隆線によって構成されるのが一般的（図 3-10・11）であるのに対して、本例は一部が三重になっている点も本場のものとは異なっており、そのために工字文自体の幅が広がって単位文の全体が長方形に近づいている。したがって、矢筈遺跡の図 1-3 は平安山原 B 遺跡の 1 と並んで、今回集成したなかでももっとも大洞 A₁ 式土器に近いが、これもまた東北地方以外のどこかに直接的な系譜を求めざるを得ない。

このことは B 種にも言えることである。B 1 種の図 1-4 は文様モチーフとしては工字文そのものであるが、石川日出志は、東北地方の大洞 A₁ 式土器では口縁部に隆線やレンズ状浮帯文などを巡らした下に工字文を加えるのであるが、本例はいきなり工字文が来ている点と、内面に沈線がない点から、東北地方以外のどこかから搬入された可能性を指摘した。さらに、B 2 種の図 1-5 について、文様は粗大であるが浅鉢から派出した同じ構図であり、違う器種にまで工字文の影響が及んでおり、奄美地方で大洞系土器の土着化が進行しているという重要な指摘をおこなった〔青崎 2002: 45〕。石川は、西日本における縄文晩期終末の東日本系土器を渉獵した際に、西日本の東日本系土器に大洞系と浮線網状文系土器で受容の様態が異なっており、大洞系土器には土着化傾向があることを論じたが〔石川 1997: 37～38、石川 2000: 1222〕、奄美地方の大洞系土器についても同様の傾向があることを指摘したのである。

B 2 種の図 1-5 や 6 は在地系の胎土や色調からすれば石川の指摘は当を得たものといえるが、それでは搬入品と考えられる A 種や B 1 種の故地はどこなのだろうか。これを考えるうえで、図 1-3 に見た東北地方の土器とは異なる特徴と II 類の特徴が示唆するところが大きいので、次に II 類を見ていくことにしよう。

3-3. II 類

矢筈遺跡の II 類 A 種である図 1-7 の文様モチーフと最も近いのは、北陸地方の長竹式土器である。長

竹式は大洞 A₁ 式に併行する土器型式である。前段階の下野式において、鉢形土器の体部文様が長方形に近い重四角文による表現をとるようになるが、それに大洞 A₁ 式の工字文の影響が加わることによって重四角文という在地の文様を発達させる点に特徴がある。図 3-12～14 に石川県松任市長竹遺跡出土の長竹式土器を示したが、14 は図 1-7 ときわめてよく似ている³。

石川は、岡山市津島岡大遺跡の土器（図 3-15・17）が、長竹式土器や、その直前の大洞 C₂ 式新段階に併行する下野式土器に系譜を求めることができるとしたが〔石川 1997: 36、2000: 1235～1236〕、その際に香川県高松市林・坊城遺跡の楕円形の土器（図 3-16）を取り上げて、これも下野式～長竹式土器の装飾を忠実に模倣していることを指摘している。林・坊城遺跡の沈線で描いた長方形の文様モチーフは、B 種である手広遺跡の図 1-11 に類似している。また、津島岡大遺跡の図 3-17 は、胴部文様帯の下端と底部直上の無文帯の間を幅広く削り下げて、上下の文様帯と無文帯を浮き立たせているが、これは手広遺跡の 11 に見られた手法と共通する。

このように、南西諸島の II 類は、いずれも北陸地方の長竹式の影響を強く受けて生じたものといえる。A 種の図 1-7 は長竹式そのものといってよいのに対して、B 種の図 1-11 は変形が著しい。I 類と同じ傾向を認めることができる。

I 類に戻って注目したいのが、矢筈遺跡の図 1-3 の文様モチーフである。長竹式の図 3-12～14 は、年代の差はほとんどないと思われるが、12 は工字文技法をとる点で大洞 A₁ 式に近い。しかし、単位文の条数は 2 条以上になっており、そのために単位文の幅が広がって長方形に近づいている。先に述べたように、下野式や長竹式の鉢形土器の胴部文様に典型的なのは、弥生中期の大地型の鉢の胴部文様にまでつながる多重の沈線文による長方形の枠状文である。矢筈遺跡の 3 は、これと関係が深い。

3-4. III 類

トマチン遺跡の III 類は、口縁部に突帯をもつものと、胴部に 2 条の突帯をもつもの、口縁部と胴部に幅の広い隆帯をもつものがあり、それぞれ a 種、b 種、c 種とする（図 2）。

島袋が縄文晩期終末の浮線網状文段階と判定を下したのは、口縁部の下に無刻目の突帯をもつ図 1-13・14 など a 種を指していると思われるが、図 3-19 に示したように、たしかに長野県域を分布の中心とする

めとぼがわ
女鳥羽川式に類例が求められる。しかし、同様な無刻目突帯は図3-18に愛知県域の例を示したように、西日本一帯に広がる縄文晩期終末の突帯文土器に一般的な文様でもある。報告をした新里が、図1-13を「低平なりボン状突起をもつ鉢」としているのもそれを意識してのことであろう。図1-16も二条突帯のいわゆる二条甕に近い形態と文様構成になっている。そもそも女鳥羽川式土器は、突帯文土器の強い影響を受けて成立した土器型式なので、図1-13・14は突帯文土器の影響を考えた方がよいであろう。

しかし、b種の図1-15は胴部に2条の隆帯とその上の1か所に指頭によるくぼみのある突起をもつ土器であり、女鳥羽川式やその次の離山式にあって突帯文土器にはない文様である(図3-20)。通常、胴部が屈曲した深鉢の胴部最大径の場所にめぐらされる隆帯なので少々違和感があり、広域に動かない半精製土器である点も気になる点である⁴。

もう一つ問題なのが、c種の図1-16である。設楽は以前、小林青樹とともに西日本に広がる大洞系土器の文様表出手法を論じたが、その時に問題にしたのが「隆線連子文」と呼んだ文様である。隆線連子文は、隆線で長方形の区画をつくり、パネル状に横に連ねていく2条の隆線からなる構図を典型的な例とする大洞A₁式土器の文様である。こうした文様をもつ土器は東北地方中部以北を中心に広がっており、高知県土佐市居徳遺跡で搬入品が出土している。また、構図は違うが福岡市雀居遺跡で2条隆線文の土器が出土しており、同時に平たい幅広の隆線文の壺形土器も出土していた(図3-22)。隆線連子文を分析していった過程で、類例が山形県村山市作野遺跡にあること(図3-23)を小林が見出した〔設楽・小林2007:83~85〕。トマチン遺跡の16はその一種であり、東北地方の土器と関係が深い文様要素といつてよいだろう。

4. 南西諸島における縄文晩期終末東日本系資料の時期と系譜と意義

4-1. 時期に関して

以上、南西諸島から出土した東日本系土器と関連資料をI~III類に分類して、それぞれの時期や系譜に考察を加えてきた。ここでそれを総括して、これらの土器がもつ意義を論じる。

まず、これらの東日本系および関連する資料の時期であるが、I類のA種に代表されるように大洞A₁式併行期に比定できる。B種も文様モチーフから大洞A₁式の工字文およびその変形と見なしてよい。II類の長竹式は、日本列島の広域編年に照らして大洞A₁

式に併行し、III類の突帯文土器や浮線網状文の最古段階はいずれも大洞A₁式に接点をもつ。III類のc種は板付I式成立に関して問題にした東日本系の文様要素であり、板付I式に併行する可能性が高い(表1)。

平安山原B遺跡例を含めて、これらの外来系土器と地元の土器の共存関係を明確におさえることのできた事例は乏しいものの、縄文晩期の宇宿上層式、仲原式から弥生前期併行期の阿波連浦下層式という時期に比定されるのは間違いがなく、阿波連浦下層式がもっとも接点大きいのではないだろうか。

このように、南西諸島における縄文晩期終末の東日本系土器は、ほぼ大洞A₁式—女鳥羽川式—長竹式—夜白IIb式—板付I式—阿波連浦下層式という時期に特化しており、前後の時期を含まないことを特徴とする(表1)。ウフタIII遺跡で板付I式土器と夜白IIb式土器に大洞A₁式類似の土器が共存していたのは、この三者が併行関係にあることを裏付けると同時に、東日本系の土器が九州島の土器に随伴するようにしてもたらされたことを物語っている。

4-2. 系譜に関して

これらの外来系土器や文様要素は、I類が東北地方に起源し、II類がその影響を受けて成立した北陸系であり、III類が西日本の突帯文系と中部高地地方あるいは東北地方にまで及ぶ要素からなるように、きわめて広域にわたる要素から成り立っていることがわかる。なかでも矢筈遺跡に大洞A₁式土器と長竹式土器のオリジナルに近いものがともに存在しており、北陸地方の影響力の大きさに注目しないわけにはいかない。

南東北地方や中部高地地方では、大洞A₁式期に浮線網状文土器が形成された。浮線網状文土器の成立に大洞系土器の関与は大きい、これらの地域に大洞A₁式土器自体はそれほど多くもたらされてはいない。それに対して、新潟県域や石川県域は浮線網状文土器の主体的な分布圏であるといつても、工字文の土器がより強力に影響を与えているのは、新潟県豊栄市鳥屋遺跡〔豊栄市編1988〕、石川県松任市長竹遺跡〔石川県教育委員会文化財保護課編1977〕、同乾遺跡〔岡本編2001〕などの出土土器からうかがえる。ただし、長竹式では大洞C₂式新段階の下野式土器や中部高地地方の佐野II式の伝統などによって変形が進行し、独特な工字状文を形成していくのも事実である。矢筈遺跡の3にしても、大洞A₁式の要素は多分にあるが、長竹式の重四角文の形成と密接な関係をもっている点はすでに指摘したことである。

ウフタIII遺跡の5や6にみる工字文が沈線化して

表 1 縄文晩期～弥生前期の土器編年（編掛けは弥生時代）

	南西諸島	北部九州	中部瀬戸内	近畿	東海西部	中部高地	北陸	南関東	東北北部	
弥生早期併行	仲原式	夜白Ⅰ式	津島岡大式	口酒井式	馬見塚F地点式	佐野Ⅱb式	下野式	安行3d式・前浦Ⅱ式	大洞C ₂ 式（新）	縄文晩期
	弥生前期併行	阿波連浦下層式	夜白Ⅱa式 板付Ⅰ式・夜白Ⅱb式	沢田式	船橋式	五貫森式	女鳥羽川式	長竹式（古）	桂台式	
板付Ⅱa式			遠賀川式（古）	遠賀川式（古）・長原式	馬見塚式	難山式/氷Ⅰ式（古）	長竹式（新）	千綱式/荒海1式	大洞A ₂ 式	
板付Ⅱb式			遠賀川式（中）	遠賀川式（中）・水走式	遠賀川式（中）・壱王式	氷Ⅰ式（中）/（新）	柴山出村式（古）	荒海1式/荒海2式	大洞A'式	
		板付Ⅱc式	遠賀川式（新）	遠賀川式（新）	遠賀川式（新）・水神平式	氷Ⅱ式	柴山出村式（新）	荒海3式/荒海4式	砂沢式	弥生前期

直角に近い構図を特徴としているのも、北陸系の三叉文である島根県松江市三田谷遺跡を標識とするいわゆる三田谷文様のI字の三叉文（図4）と類似した特徴を備えているとみなすことができる。すなわち、ここにも北陸地方あるいは山陰地方の影響を認めることができる。また、ウフタⅢ遺跡のI類B1種である4は搬入品と考えられたが、これも工字文が変化している点で北陸地方に故地が求められるかもしれない。類例の探索など、今後の課題としたい。

4-3. 意義

石川日出志は西日本における縄文晩期終末の東日本系の土器には、搬入品に近いものから在地の土器に要素の一部を取り込んだものまで、幅の広い変異のあることを指摘した。具体的に言うと、

- A種）東日本で出土する資料と同様の諸特徴を備えたもの
- B種）一部に東日本の実例とは異なった特徴も具備したもの
- C種）西日本での改変が著しく、東日本の実例から大きく隔たった特徴をもつもの
- D種）西日本在来の土器に東日本に由来する要素を部分的に取り入れたもの

の4種類である〔石川2000：1222〕。これらの東日本系土器には北陸地方の長竹式土器などの影響が強いことと、浮線網状文土器に規範を崩していないものが多いのに対して大洞系土器は在地での変容が進んでいることを論じたが、土着化現象が奄美地方でも進行していることに気づかれたのは、すでに触れたとおりである。平安山原A・B遺跡の大洞系土器の検出は、該期の東日本系土器の分布が沖縄県域にまで及んでいる新知見をもたらした。そればかりではなく、胎土分析の結果とA・B種の存在は、石川のいう大洞系土器の土着化現象が南西諸島全域に及んでいることを明らかにした点に意義がある。

本稿では南西諸島の縄文晩期東日本系土器に対し

石川の分類を参考にして、起源の地の土器とよく類似したA種と改変が進んだB種に区分した。その結果、工字文系のI類と沈線文系のII類のいずれもA種とB種が存在していることを確認した。また、工字文系—大洞系といっても、北陸地方で変容を受けた可能性が高いことを指摘した。I類とII類のいずれもA種が存在している矢筈遺跡は、南西諸島への大洞系土器拡散の鍵を握る重要な遺跡であったとみなすことができよう。

小林青樹と設楽は、佐賀県唐津市大江前遺跡の隆線重弧文という東日本系の文様要素をもつ土器を分析する機会に恵まれた。類例を集めて隆線重弧文が板付Ⅰ式土器の文様の中心をなす沈線重弧文の祖形の可能性があることと、隆線重弧文の起源にはまだ未解明の部分があることを認めつつ、東北地方中部以北の大洞A₁式にその系譜を求めた。それが北部九州で水田稲作をはじめた社会の変動期に相当している点に、東日本系土器西漸の意義があるであろうと予測したのである〔設楽・小林2007〕。

ウフタⅢ遺跡のように、板付Ⅰ式土器と夜白Ⅱb式土器および大洞系土器の三者がそろって奄美大島に認められるのも、この現象が南西諸島に及んでいたことを物語っている。しかし、この時期に南西諸島に稲作がもたらされた形跡はないので、大洞系土器の西漸現象は生産経済の変化も遠因とはなっていないが、直接的にはそれとは別の背景を求めなくてはならない。この点についても、石川の指摘が重要である。石川は、大洞C₂式新段階～A₁式の土器の西方への展開が前後の時期に比べて異常ともいえる現象は、縄文時代から弥生時代への社会変動期に相当すると述べたうえで、東にもたとえば非農耕地帯である北海道稚内市オニキリベツ遺跡や釧路市緑ヶ岡遺跡にまで大洞A式系の壺が及ぶ、列島規模の土器要素の広域移動現象を重視した〔石川2000：1234～1235〕。西における同じ現象が、平安山原B遺跡の大洞A₁式系の台付鉢であるとよい。

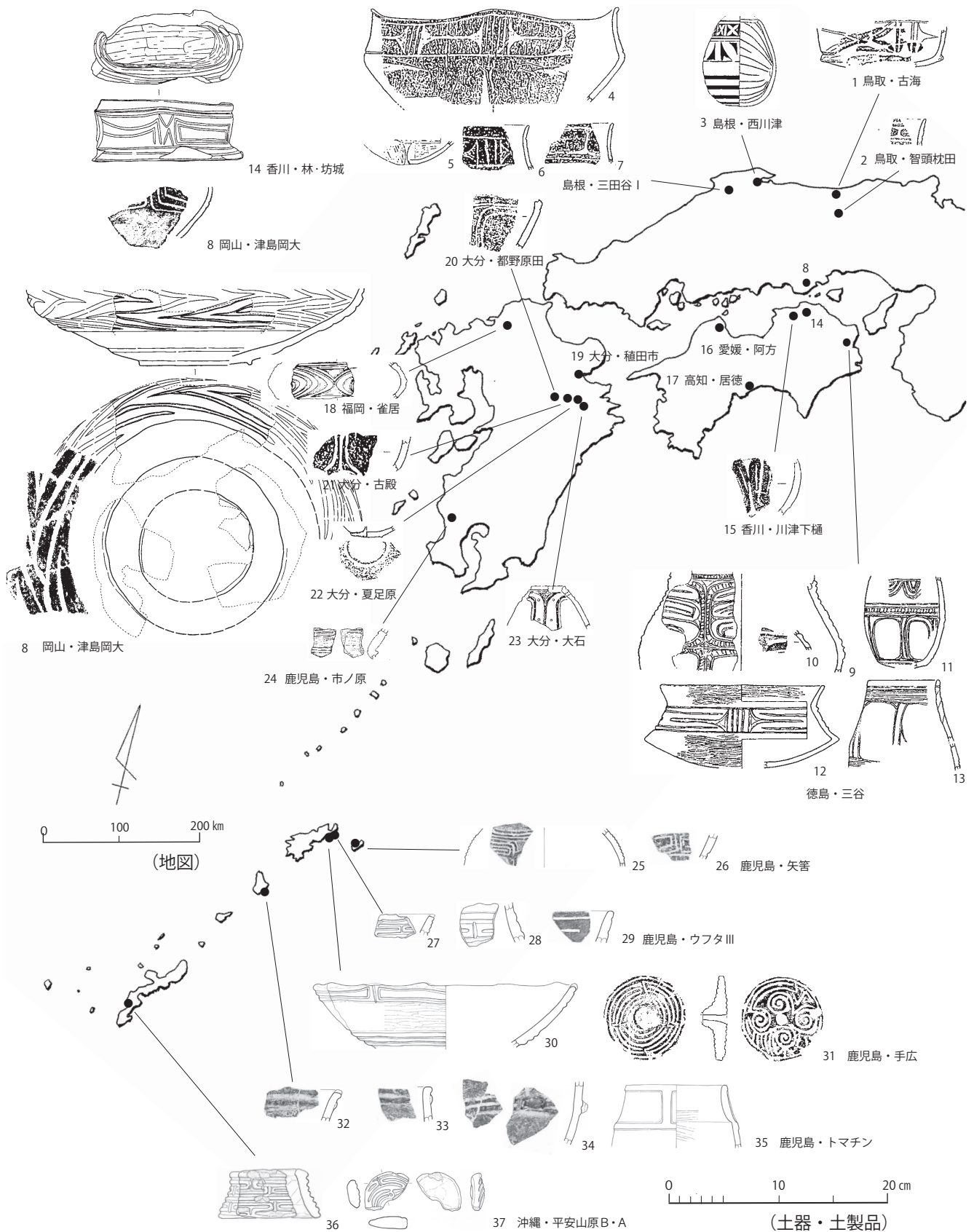


図 4 南西諸島の東日本系土器及び九州・中国・四国地方の三田谷文様の土器と関連資料

5. おわりに

これまで述べてきたことを要約して結びとしたい。

南西諸島の縄文晩期終末の東日本系土器およびそれと関連する資料は、奄美諸島の喜界島は喜界町矢筈遺跡の 2 例、奄美大島は龍郷町ウフタⅢ遺跡の 3 例、同町手広遺跡の 2 例、徳之島町は伊仙町トマチン遺跡の 4 例、そして沖縄の北谷町平安山原 A・B 遺跡の 2 例、都合 13 例である（図 4）。そのほとんどが阿波連浦下層式期に位置付けられると思われ、広域編年では板付 I 式一夜白Ⅱ b 式一突帯文土器一長竹式一女鳥羽川式一大洞 A₁ 式という時期に限られる（表 1）。

これらは施された文様などから、工字文のⅠ類、沈線文のⅡ類、突帯文をもつⅢ類に分類される。Ⅰ類は東北地方の大洞系、Ⅱ類は大洞系の工字文から派生した北陸地方の長竹式の系統、Ⅲ類は突帯文系と浮線網状文系の女鳥羽川式に類似する文様、および大洞 A₁ 式と関係が深い隆帯文である。Ⅰ類とⅡ類には、祖形となる大洞 A₁ 式土器や長竹式土器と比較的類似度の高い A 種と、変化がうかがえる B 種の区別があるが、A 種も大洞 A₁ 式や長竹式そのものではない。矢筈遺跡で採集された土器はⅠ類とⅡ類からなるが、両方とも A 種であり、南西諸島における縄文晩期終末の東日本系土器拡散の起点になった可能性があり、この遺跡の追跡調査を必要とする。それとともに、いずれも北陸地方の要素を強くうかがうことができ、そのほかの土器を含めて北陸地方あるいは山陰地方の系統が拡散に強く関与していた疑いがある。Ⅲ類のうち b 種は浮線網状文の系統の可能性を考えたが、西日本の浮線網状文系土器は搬入品のみが知られているので、さらなる検討を要する。

西日本における大洞系土器の土着化現象が指摘されているが、本稿でも B 種の存在によってそのことを追認した。平安山原 B 遺跡の台付鉢は胎土にアカホヤ火山灰を含むので西日本のどこかで製作されたものであり、A 種であるが土着化現象のあらわれと見なすことができる。この土器は大洞 A₁ 式の規範からはやや逸脱しているが、東北地方北部の土器の要素が色濃く、東北地方北部の人々の直接の関与のもとに製作された土器と見なさざるを得ない。

板付 I 式土器の形成に東北地方北部の土器が影響していたことは別に論じたことであるが、ウフタⅢ遺跡では大洞 A₁ 式に類する工字文の土器が板付 I 式土器と一夜白Ⅱ b 式土器に随伴するように存在しており、三者の関係性の深さを物語る。このことが象徴するように、この時期の沖縄県域にまでおよぶ東日本系土器

の拡散は、水田稲作の導入と直接関係しないまでも、縄文時代から弥生時代へと移行する大きな時代の転換期に生じた日本列島全域を巻き込んだ現象であり、その要因の解明は日本列島全体を視野に入れて取り組むべき課題といってよいだろう。

2017 年 12 月 28 日稿了

謝辞

本稿を執筆するにあたり、以下の方々に各遺跡出土土器の実測図と拓本をとらせていただき、掲載を許可していただきました。平安山原 A・B 遺跡：山城安生氏・米須健氏・島袋春美氏・松原哲志氏・土岐耕司氏（北谷町教育委員会）、矢筈遺跡：英啓太郎氏、野崎拓司氏（喜界町教育委員会）、手広遺跡：木下尚子氏・小畑弘己氏・岡田勝幸氏（熊本大学文学部考古学研究室）、ウフタⅢ遺跡：東和幸氏（鹿児島県埋蔵文化財センター）、トマチン遺跡：新里亮人氏・常未来氏（伊仙町教育委員会）。

また、新里貴之氏（鹿児島大学埋蔵文化財センター）にはウフタⅢ遺跡などの文献をご高配いただき、トマチン遺跡の資料実見の手配をしていただき、関根達人氏（弘前大学人文学部）と柴正敏氏（弘前大学理工学部）には平安山原 B 遺跡の大洞系土器の胎土についてご教示を賜りました。平安山原 B 遺跡の大洞系土器の情報は、東京大学の國木田大氏にいただいたものです。英文要旨は国際教養大学の根岸洋氏に校閲していただきました。

筆者は 2017 年 4 月から 10 月まで、特別研究期間を利用して琉球大学の池田榮史氏と後藤雅彦氏に資料や図書の閲覧、宿舍の紹介などで便宜をはかっていただき、那覇に滞在しながら北谷町教育委員会にかよって平安山原 B 遺跡をはじめとする資料を熟覧させていただきました。11 月には熊本大学、鹿児島県埋蔵文化財センター、さらに喜界島、徳之島を訪れて、資料を調査することができました。本稿は、その成果物です。また、2017 年 6 月 16 日には後藤雅彦氏にお誘いいただいて沖縄考古学会の例会にて「西日本の大洞系土器」という演題で講演をおこない、会長の當眞嗣一氏をはじめとする考古学会の方々にお世話になりました。

沖縄で親しくさせていただいた皆様とともに、その後おとづれた奄美諸島での資料実見でいろいろと便宜をはかっていただいた喜界町と伊仙町の皆様、熊本大学と鹿児島県埋蔵文化財センターの皆様には深く感謝申し上げます。

同僚の大貫静夫氏と佐藤宏之氏には特別研究期間

の取得をご許可いただきました。篤くお礼申し上げますとともに、2017年度で東京大学を退職される大貫静夫さんに本稿を謹んで献呈いたします。

[註]

- 1) 矢筈遺跡は大字の「池治」を冠して「池治矢筈遺跡」とした方がよいかもしれないが、とりあえず矢筈遺跡としておく。矢筈遺跡の土器については、喜界町教育委員会の野崎拓司氏を通じて発見者の英啓太郎氏より実測と拓本の作成とその掲載をご許可いただいた。
- 2) 島袋が南九州から沖縄県地方の東日本系土器を集成した一覧表の中で、トマチン遺跡の土器を伊藤慎二の同定として「浮線文土器段階？」と記載している。
- 3) 拓本はよく似た雰囲気だが、写真では長竹遺跡の例が多少立体的な表現であるのに対して、矢筈遺跡例は平板的である。ただし、長竹遺跡にはまったく沈線と化したものも多いので、関係が深いことは否定できない。実見して比較するのを課題としておく。
- 4) 胴部の隆帯に間隔をあけてアクセントの文様を入れるのは、鹿児島県松元町^{まえばら}前原遺跡出土の突帯文土器^{ひこぼろ}干河原段階とされる二条甕に類例がある〔宮地 2017: 155〕。編年の位置づけがむずかしい土器であるが、関係があるとすればⅢ類は a・b 種ともに突帯文土器に起源が求められることになるが、今後の課題としたい。

参考文献

青崎和憲 2002「まとめ」『ウフタⅢ遺跡』44～47頁、龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(2)、鹿児島県龍郷町教育委員会

石川県教育委員会文化財保護課編 1977『松任市長竹遺跡発掘調査報告 県道松任一矢作線道路改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県教育委員会

石川日出志 1985「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』第37巻第4号、384～401頁、信濃史学会

石川日出志 1997「岡山県内出土刻目突帯文期の東日本系土器」『古代吉備』第19集、29～39頁、古代吉備研究会

石川日出志 2000「突帯文期・遠賀川期の東日本系土器」『突帯文と遠賀川』1221～1238頁土器持寄会論文集刊行会

岡本恭一編 2001『松任市乾遺跡発掘調査報告書A・C区下層編』(財)石川県埋蔵文化財センター

小林青樹編 1999『縄文・弥生移行期における東日本系土器』考古学資料集9、平成10年度文部省学術研究費補助金特定研究A(1)『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』考古学研究成果報告書、国立歴史民俗博物館春成研究室

設楽博己・小林青樹 2007「板付I式成立における亀ヶ岡系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』新 弥生時代のはじまり第2巻、66～107頁、雄山閣

島袋晴美 2016「平安山原B・C遺跡の遺構と遺物」『平安山原B・C遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成20・21年度)—』北谷町文化財調査報告書第40集、431～435頁、北谷町教育委員会

島袋晴美ほか編 2016A『平安山原A遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成19・21・22・23年度)—』北

谷町文化財調査報告書第38集、北谷町教育委員会

島袋晴美ほか編 2016B『平安山原B・C遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成20・21年度)—』北谷町文化財調査報告書第40集、北谷町教育委員会

新里貴之編 2013『徳之島トマチン遺跡の研究』鹿児島大学埋蔵文化財センター

曾我貴行ほか 2001『居徳遺跡群I』(財)高知県文化財埋蔵文化財センター調査報告書第62集、(財)高知県文化財埋蔵文化財センター

龍郷町教育委員会編 2002『ウフタⅢ遺跡』龍郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書(2)、鹿児島県龍郷町教育委員会

豊栄市編 1988『豊栄市史 資料編1 考古編』豊栄市

西谷大編 1986『手広遺跡(概報)』研究活動報告20、熊本大学文学部考古学研究室

松村博道ほか 1995『雀居遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集、福岡市教育委員会

宮地聡一郎 2017「西日本縄文晩期土器文様保存論—九州地方の有文土器からの問題提起—」『考古学雑誌』第99巻第2号、145～194頁

山城安生・島袋春美・松原哲志・呉屋広江・土岐耕司 2017「北谷町平安山原B遺跡出土の亀ヶ岡系土器」『南島考古』第36号、135～142頁、沖縄考古学会

吉田 寛 1993「大分市植田市遺跡出土の縄文晩期土器—特殊な鉢形土器の紹介を中心に—」『古代』第95号、12～23頁、早稲田大学考古学会

挿図出典

図1-1～11・13～16、図2-1～6・8～13、図4-24～30・32～37：設楽原図

図1-12、図2-7、図4-31：西谷編1986、27頁第13図

図3-1・4：藤沼邦彦・境沢宏美・山口朋美2006「津軽市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集(2)』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告4、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター、120頁第80図58・59

図3-2：高橋龍三郎編1991『縄文沼遺跡発掘調査報告書』小泊村文化財調査報告第2集、小泊村教育委員会、115頁第75図7

図3-3・6・8：藤村東男編1986『九年橋遺跡第9次調査報告書』北上市文化財調査報告第42集、北上市教育委員会、PL403-9・12、394-7

図3-5：三田史学会1954『亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究—』図版第28-7

図3-7・9・10：藤村東男編1987『九年橋遺跡第10次調査報告書』北上市文化財調査報告第44集、北上市教育委員会、PL455-8、458-1・13

図3-11：鈴木明美1994『飯島遺跡(1992年度)』北上市埋蔵文化財調査報告第15集、北上市教育委員会、実測図版17-109

図3-12～14：石川県教育委員会文化財保護課編1977『松任市長竹遺跡発掘調査報告 県道松任一矢作線道路改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県教育委員会、35頁第34図217、33頁第32図163、34頁第33図189

図3-15・17、図4-8：山本悦代編1992『津島岡大遺跡3—第3次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第5冊、岡山大学埋蔵文化財センター、51頁図38-6、76頁図61-389

図3-16、図3-14：宮崎哲治編1993『林・坊城遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊、香川県教育委員会、58頁第22図51
図3-18：芳賀陽編1997『水神貝塚』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第36集、豊橋市教育委員会、73頁挿図第53-11
図3-19・20：設楽博己2017『弥生文化形成論』塙書房、139頁図43-60・146頁図47-61

図3-21～23：設楽・小林2007、74頁図3-9・12、85頁図12-9
図4-1～7・9～13・15・20～23：設楽博己2004「遠賀川系土器における浮線文土器の影響」『島根考古学会誌』第20・21集合併号、島根考古学会、202頁第6図
図4-18：設楽博己2000「縄文晩期の東西交渉」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会、1186頁図14

Consideration to Obora-type pottery at the end of the Jomon period in *Nansei-shoto*

Hiromi SHITARA

The pottery at the end of the Jomon period derived from the eastern Japan were distributed over whole of the western Japan and had reached also at the *Amami* area. These are *Obora* A₁ type course pottery. Recently, it became clear that those are even distributed over Okinawa pref. by the pottery and the clay ornament found at Hanzanbaru A and B sites at Chatan-cho, Okinawa pref. This paper examines the characteristic of those materials with the elaborate observation. The “eastern” type pottery found at *Nansei-shoto* are mainly look like the *Tohoku* course pottery and the *Hokuriku* course pottery, but it was already pointed that the *Obora* course pottery in *Amami* area were tend to be affected by local tradition. I will ratify this previous studies by the analysis of diversified building technique and mention that it is difficult to deny the direct concern for the making of these materials by the people living at the northern mainland in Japan in this article.